

日本仏教はなぜ「在家主義」的か？

安達俊英

現代の日本仏教の特色はまさに「在家的」という点にあると言えよう。まずそれが顕著なのは僧侶においてである。その生活はほとんど在家者と変わらないのであるから。更には、僧侶に対する尊敬の念が、他の仏教国に比べてかなり低く、ときには在家者（檀信徒）の方が発言に関して優位に立つ傾向も見られる。また、仏教系の新興宗教は大半が在家主義的といえる。

では、なぜ現代の日本仏教は在家主義的なのか、その理由を考察するのが本発表のテーマである。ただ、このテーマに関し、今回、発表者自身による新たな研究成果や新知見があるというわけでもない。むしろこれまでに積み重ねてこられた種々の成果に基づきつつ、その理由をできる限り広範にわたって列挙し、それらを整理・統合してゆこうというものである。

そもそも、日本仏教は国家仏教として出発したが、国家統制が強固である間は基本的に出家主義であったと見なせよう。しかしながら、私度僧が増えると同時に、律令体制が弱体化してゆくにつれて出家主義が崩壊し出す。

また、鑑真によって確立された授戒の制度もあまり長く続かず、日本仏教における持戒の意識は概して希薄なままで推移してゆく。既に平安時代から、実質的に結婚している僧侶が少なからず存在したという事実は、この時点で僧侶の在家化が始まっていることを示している。

それに加えて、鎌倉期に法然が出て専修念仏を弘めたが、この教えによると、出家であろうと在家であろうと、誰もが実践可能な称名念仏を専修するか否かで往生の可否が決まるわけであるから、往生という目的の前では、出家と在家の差は無いということになる。親鸞の「非僧非俗」や「同朋同行」という考え方も、この方向性を更に押し進めたものと考えられる。

室町期になって村の自治（惣村制度）が強まると、在家主導で寺の管理などが行われるようになる。また、江戸期の檀家制度は寺院に経済的安定をもたらしたが故に、逆に僧風の乱れも引き起こし、僧侶の在家化を押し進める一因となった可能性が考えられる。

ただ、それでも江戸期までは基本的に僧侶は特殊な身分であり、出家主義的な要素も多分に残っていた。それが大きく転換したのが、明治維新であった。明治政府は僧侶の特権を廃止すると同時に、妻帯・飲酒肉食・俗服被着・兼業を認め、強制的に苗字・住所などを定めさせた。僧侶を《身分》から《職分（職業）》に転換せしめようとしたわけである。この方針が最終的には受け容れられることとなり、現代の在家的僧侶像が確立するわけである。

ただ、このような僧侶・寺院の在家化は在家信者の承認がなければありえなかったであろう。おそらく、日本仏教においては悟りを目指すという概念は十分には定着せず、在家信者は主として仏教に現世利益・死後安寧・先祖回向などを求めていたと推測されるが、このような在家者の仏教への期待が、僧侶・寺院の在家化を承認する大きな理由となったのではなかろうか。

キーワード：持戒・専修念仏・明治維新